



# 学校便り 琢磨

令和4年度 第25号 R5.3.16 三豊市立詫間小学校

## 栄光を讃える

今週の火曜日、卒業式予行の前に表彰式をしました。

【香川県教育委員会表彰】	6年	米田 萌音			
【香川県小学校長会長表彰】	6年	尾崎 蓮斗	杉村 巳艶	松田 佳亮	
		安部 ひなた	河田 彩花		
【学校体育優秀者表彰】	6年	水口 銀二郎	大平 陽晴		
【6か年皆勤】	6年	内田 愛香	渋谷 真音	中林 美月	
		大平 珠埜	松田 歩実	山口 宗悟	
		倉本 恭一	三宅 規仁		

おめでとうございます！

## ミニ謝恩会

3月14日（火）。卒業式も目前に迫る中、6年生の皆さんが「ミニ謝恩会」を開いてくれました。「体育学習発表会で、先生方への感謝の気持ちをサプライズで伝えることができなかったので、ぜひ何かしたい。」と児童会役員さんから相談されていました。それなら、「ミニ謝恩会」をしたらどうだということになって、児童会役員さんと何回か相談し、6年生の皆さんとも相談し、3月14日の3・4時間目に、「ミニ謝恩会」が実現したというわけです。

### 【3時間目：先生方と運動場で思い切り遊ぶ！】



「ふえ鬼（鬼がどんどん増えていく鬼ごっこ）」を2回もしました。教職員がまず鬼となり、運動場を駆け回りました。その後は、教職員と各クラスがドッチボール対決をしました。さすがは6年生です。教職員チームを全員アウトにしてしまったクラスもありました。こんなに楽しそうな子どもたち、子どものように喜ぶ教職員の姿は見たことがありませんでした。

### 【4時間目：ランチルームで語り合う！】

4時間目は、ランチルームでBGMを聞きながら、飲み物を飲みながら、教職員と思い出を語る会でした。担任の3人の先生に、クラスの代表者がお礼の言葉を述べるというサプライズ



もありました。代表の子どもたちは、堅苦しくなく、飾らない素直な気持ちを言葉にしていたと思います。

短い時間でしたが、最後のいい思い出になったことでしょう。子どもたちも、私たち教職員にとっても。

## 春は別れの季節 そして出会いの季節

いよいよ明日。卒業式の日がやってきます。皆さんも同じかもしれませんが、私は「別れ」も「出会い」も少し苦手です。理由を簡単に言えば、環境の変化への対応があまり得意ではないからです。「そうは、見えませんがね。」と、よく言われるのですが、実は、これでもがんばって表面は平気なふりをしているのです。どちらかと言えば「別れ」の方が嫌です。

でも、別れがあるのは出会いがあったからです。誰一人知り合いのいない場所にたった一人で入って行ったとします。それは、不安でたまらないでしょうね。でも、誰かが話しかけてくれて、仲良くなって、いつの間にか、その人と一緒にいるのが楽しくてたまらなくなって。ずっとこのままこの状態が続けばいいのにと考えていたのに、また離ればなれになって…。誰一人知り合いのいない場所にたった一人で入って行って…。それを繰り返すわけです。そんなことは、よく分かっているはずなのに、やっぱり別れは寂しくてたまらないです。

私は、小学校の時にとても仲良しの友達がいました。帰る方向も同じで、家も近かったので、お互いの家によく遊びに行ったものでした。日が暮れて家に帰っても、まだ話がしたくて「有線電話」で電話して、何十分も話をしている家族に叱られることもよくありました。その友達といると、とても楽しくて心が安定して、その友達と学校で会えるので、明日が来るのが楽しみで仕方ありませんでした。その友達の好きな物やおもちゃは、全部言うことができるくらい仲良しの友達でした。

小学校6年生の3学期になっても、私は、その友達と一緒にいつものように帰っていました。いつもと変わらず、小さな事で大笑いをしながら帰っていました。どんな話だったのかは覚えていませんが、本当に大したことないこと（例えば、近所の犬が自分の尻尾を噛もうとしてぐるぐる回っているんや。おもしろいやろ、ハハハ。）だったと思います。そんな時間が、これからもずっと続くと信じて疑いもしませんでした。ですから、「〇〇君は、中学校で何部に入るん？ぼくも〇〇君と同じ部活にしようかな。」と聞いたのです。その時に、その友達が、少し寂しそうな顔をしました。「どしたん？」と聞くと、「佳樹君は、陸上部に入るんやろ、走るの速いから、きっと活躍できるわ。実は、前から言わないかんとおもうたんやけど、なかなか言えんかった。今日は、思い切って言うわな。ぼくな、高瀬中学には行かんや。」

あまりにも突然で、あまりにも予期しなかった告白に、私の頭の中は真っ白になりました。「どこに行くん？」と聞くのが精一杯でした。「遠い所の中学校。汽車（電車のこと）に乗って通うことになるんや。」と、友達はつぶやくように答えました。「じゃあ、もうすぐお別れなん？」それっきり二人は無言のまま並んで帰っていきました。

それからしばらく、私たちは、とてもぎこちない関係でした。大好きな友達に裏切られたような気持ちを私がおもっていたからです。もしかしたら、人生で初めての「別れ」だったからなのかもしれません。一緒に帰ることもさけていました。本当は、一緒に帰りたいのですが、一緒にいるのがつらくて寂しかったからです。その友達だって、私を裏切ったわけではなくて、私と一緒に中学校に行きたかったのだと思いますが、仕方なく遠くの中学校に進学することになったのです。そんなことは分かっていたのですが、どうしても受け入れることができなかつたのです。

このまま卒業かと思っていたのですが、卒業式の前日、校門の所でその友達は私を待っていてくれたのです。「一緒に帰ろう！」とその友達に言われ、私は「別に、ええよ。」と心の中とは真逆の返事をしてしまいました。本当は、とても一緒に帰りたいのに。

帰りながら、途中で、道ばたに座って話をしながら、何時間もかけて帰りました。やっぱり、その友達といると楽しいのです。なごりおいしいという感情も、この時に初めて経験しました。真っ暗になって家に着き「あんた、明日卒業式やのに、いつまで遊んでるん！」と母親にめちゃくちゃに叱られたことは今でも覚えています。翌日の卒業式で、その友達と話をしたかどうかは忘れてしまいました。でも、卒業式の前日に、前と同じように、遊びながら帰ったことは、きっと別れの言葉のかわりだったのだと思います。その友達のことが、「なつかしい。」と思えたのは、中学に入って新しい友達ができただったと思います。